

チュニティ思想の中核一自主性

ドイツ・フランケン・チュニティ思想研究会会長
マルクス・フィドラー

チュニティ哲学では、人類史を、自主性を実現するための闘争と見なしています。それゆえ、自主性に対する正しい理解は、チュニティ思想を全面的に理解するうえで前提となります。

そのため、これから自主性について具体的に説明しようとなります。

人間は発達した有機体であるため、他の生命物質が持っていない特有の機能である思惟機能と労働機能をもっています。しかし、人間の自主性は生命物質一般がもっている、単に肉体的存在を維持しようとする本能的属性とは違って、社会的存在として生き、発展しようとする属性です。

チュニティ哲学は、人間が社会的存在であるという事実をもって人間の属性を解明しました。

人間のもっとも重要な属性は、社会的・歴史的範疇から求めるべきです。

人間が社会的存在であるというところに基づいてのみ、人間の属性が解明されます。

社会の中で生きながら人間は、あらゆる束縛と従属に反対してたたかうようになります。

こういうところから、自主的に生きようとする自主性を身につけるようになります。

したがって、自主性は、世界と自己の運命の主人として自主的に生き、発展しようとする社会的人間の属性となります。

人間は自然を改造し、いかなる社会的従属にも反対し、すべてを人間に奉仕するようにします。

金正日総書記は、このような社会的・歴史的範疇について次のように述べました。

「人間は社会的従属と自然の束縛、古い思想と文化の束縛から解放されてはじめて、自主性を完全に実現することができます」

こうしてこそ、人間は自主的に生きようとする自己の自主性を実現することができます。

総体的に自主性は、チュニティ思想の中核です。

自主的に生きようとする人間の属性によって、人間は社会的・歴史的に発展し、

最終的には人類史が自主性を実現するための闘争になるのです。

チュチェ哲学が明らかにしたように、自主的に生きようとする人間の要求は、自己の運命を自分の手に握り、あらゆる従属と拘束に反対してたたかうようにするうえで決定的な役割を果たします。

金正日総書記は次のように述べています。

「社会発展の歴史はつまるところ、人間の自主性、創造性、意識性の発展の歴史であると言える」

人間の本質的属性は、社会的・歴史的過程で形成され、発展します。

これは人間が社会的存在であるという事実に基づいています。

マルクス・レーニン主義が唯物論的世界観であるとすれば、チュチェ思想は人間中心の世界観です。

チュチェ思想はその体系と内容において新しい思想です。

したがって、チュチェ思想は独創的で革命的な新しい思想と見るべきです。